

# 先天性全盲の男子高校生との面接過程における 関係のあり方についての一考察

松 崎 亮 介

## 〔抄 録〕

「人前で話をする事ができない」という主訴を抱える先天性全盲の男子高校生との二年半にわたる面接過程を提示し、本事例を通して症状の持つ意味、セラピストとクライアントの関係のあり方等について検討し、既存の枠にとらわれない支援のあり方等について考察した。先天性全盲という絶対的な感覚の違いと症状としての沈黙を前に、セラピストは「わからない」という思いに立ちすくんだのだが、セラピストが抱いたこの「わからない」という感覚こそが面接を進めていく鍵であると結論付けられた。

キーワード 先天性全盲、沈黙、「わからない」という感覚、支援のあり方

## I. 問題

古代ギリシアの哲学者、アリストテレスは人間をその生活形態から「社会的動物」とであると論じた。社会とは、平たく言ってしまえば人の集まりのことであり、人間はその集団の中で生活を営んでいる。人が社会との関わりを持ちたくないどれだけ望んでも、その願いは叶えられることはない。人である限り、この世に生を受けた瞬間から、いやそのずっと以前より社会という集団の枠に絡めとられてしまっている。状態としての孤立・孤独は存在しえても、人間と社会は本質的に不可分であり、他者の存在なくしては生きていくことはできない。

臨床心理学とは、人が社会で生きていく中で、何らかの理由で個人と社会との境界面に混乱が生じた時に、心理学的知見と技法に基づき解決を図る方法の学問体系である。今日では、そのための様々な技法が研究され、体系化されている。どの技法にも共通していえる事は、程度の差こそあれ、いずれもクライアントへの理解を足がかりとして発展していくということである。面接を通して、クライアントを理解しようと努め、問題の所在を明らかとし、共により良い方向へ歩んでいこうと援助を行うのは自然な流れと言えよう。しかし、相手は“なま身”の人間であるので、実際の心理臨床の現場では既存の知識体系を応用するだけでは、上手くいかないことも少なくない。

以下に挙げるのは、筆者のイニシャルケースであり、先天性全盲というハンディキャップを

持っているがゆえに、セラピストとクライアントのスムーズな意思疎通が難しく、セラピストの方からクライアントに色々と尋ねていくことによって進展していった事例である。本事例を通して、人が人を援助するとはどういうことなのか、人とつながるとはどういうことなのかを検討し、セラピストとクライアント間での新しい関係のあり方を考察することをその目的とする。

## Ⅱ．事例の概要

**クライアント：**A君。来談時15歳。盲学校高等部1年。先天性全盲。

**主訴：**人前で話をすることができない。

**生育歴・問題歴：**妊娠中の母体異常はなく、在胎10ヶ月で出産。出産時に視力障害があることが判明。小中学校は地域の普通学校に通っていたが、高校進学を機会に盲学校へ。盲学校は全寮制で、平日は寄宿舎で生活をし、週末は実家に帰っている。

学校では緊張が強く、ほとんどしゃべることができず、他人とコミュニケーションが取れていなかった。「はい」や「いいえ」で答えられる質問や挨拶には応じることができるが、オープンクエスチョンになると沈黙してしまう。家族とは普通に会話できる。盲学校でのいじめはない。学校側ではこれをA君の心理的な問題だと捉え、担任の勧めによって来談となる。

## Ⅲ．面接経過

《「」はクライアント（以下CIと表記）、<>はセラピスト（以下Thと表記）の言葉》

＃インテーク CIが右腕でThの左ひじのあたりを持ち、一緒に面接室に移動する。CIにとっては初めての場所なので、ゆっくり歩かないと怖いかな、とThは考えていたが、CIはThの歩調に合わせて、スムーズに歩く。面接室に入り、Thが室内の様子を説明する。CIは無言でThの言葉を聞いている。＜A君そこに座ってくれる？＞ちいさな声で「あっ…」と反応するが、二の句が続かない。CIの手を椅子に誘導し、形を確認してもらってから座ってもらう。CIは背もたれには背をつけず、うつむき加減でやや猫背気味。

Thから話しかけてもCIは答えることができずに沈黙が続く。そわそわし始め、ついで、体が硬くなってくる。＜せっかくこうやってお会いできたんやし、ちょっとだけでもお話してみない？＞と、しどろもどろになりながら問い掛けると、CIはうん、と小さく頷く。

＜担任の先生からカウンセリングの申し込みがあったよね。そのとき先生な、A君が人前で緊張して喋ることができなくて困っているから、何とかならないか、ってここに相談してこれたの。A君自身はそういうことで困っていることってない？＞と尋ねると、しばらく沈黙の後「…ある」と答える。＜確かに今もA君すごい緊張してるように見えるもんなあ＞

「・・・」（少しCIの体から力が抜けたように見えた）＜誰と喋るときに緊張しちゃう？＞  
「・・・」＜家族？＞首を横に振る。＜友達？＞首を振る。＜知らない人？＞頷く。＜そっかー、今日はしんどかったねえ…＞「・・・」＜こうやって話してきたように、A君が人前で喋るときに緊張してしまうっていうことなんかについて、僕と一緒に考えていこうっていうのがカウンセリングなんよ。どう？来週も来てみる？＞と尋ねると、小さく頷く。

**臨床像：**背は高いのだが、体躯の細さが目立つ。トレーナーにジャージといった動き易い服装。いつも同じような格好で、「見る」「見られる」という概念自体が内在化されていないかのよう。髪は短めで、寝癖がついていることも。尋ねられた質問にはかろうじて答えられる場面もあるが、自発的に会話をすることはできず、対人緊張が高い。音には敏感で、音のするほうには顔を向けて反応する。家ではよくテレビを「見て」おり、野球中継や音楽番組を好む。家ではべらべらと喋り、家族との意思の疎通に問題はない様子。

**面接構造：**週一回、50分の面接。夏休みや冬休みといった学校の長期休暇中は、CIが実家に帰ってしまうため面接は休み。盲学校から相談室までは介助員に連れられてくる（＃4まで）。X年9月～X+2年3月までの約2年半、計54回の面接。尚、本事例はその内容によって四期に分けて表記してある。

**見立て：**小・中学校と普通学校にインテグレーションしていたCIは、それまでの学校生活で他者（晴眼者）との差異性を痛感し、萎縮してしまっただのではないか。その結果として、他者との境界面に混乱が生じ、「人前で話ができない」という症状が顕在化していると考えた。よって面接では、心理臨床的な関わりを軸としながらCIと安定して「つながること」を終始一貫の目標として設定した。

#### 第1期（＃1～＃12）：クライアントの住む世界との出会い

視覚に頼らない世界に住んでいるCIとどう関わっていけばよいか、全く手探りの状態で面接がスタートした。言語的なやりとりを面接の中心に据えることが難しいと感じたThは、音楽を聴くことや、粘土等を使った非言語的なやりとりの方法を提案する（＃1）も、「いや、いい…」と応じたCIの言葉に、暗闇に放り出されたかのような気持ちになる。こちらの問いかけに対し、答えることができない場面がほとんどなので会話が成立しにくく、かといって非言語的なアプローチにCIは興味を示さない。更に沈黙が続くのが「しんどい」というCI（＃2）に対し、自発的な発話を待ち続けるわけにもいかなかった。八方塞がりかと思われたが、全盲というThにとって全くの未知の世界に対する戸惑いや認知の違い等をオープンにし、尚且つそれがCIにとっての侵入体験や傷つき体験にならないよう留意しながら、Thの方から色々とCIに質問してみることにした。CIが答えることができない場面は、機を見て、沈黙が長引き過ぎないように介入を行った。その結果、ぼつりぼつりではあるがCIが答えることのできる場面が現れてくる。

CIは介助員の付き添いで来談していたが、＃4からはひとりで来談となる。そのことから歩

行訓練の話題に。＜…その、A君がどんな風に感じてるか全然わからないから、いろいろ教えてもらいたいなって思ってるんやけど…。A君はどんなものを手がかりにして歩いているの？＞「・・・」答えることができない様子。＜もちろん点字ブロックのあるところは…＞「あっ、はい、点字ブロック」＜うん。そうだろうけど、点字ブロックがない場所も多いよね？＞「はい」＜そういう所って、何を手がかりにして歩いているのかなって＞「・・・」＜どんなものを手がかりにして歩いているのかなあ…。建物の壁とか…？＞「あっ、はい」＜それだけで歩けるのかな…。あとは方角なのかな？＞「・・・」何かを考えながら、首を傾げるCI。＜微妙に違う？＞と尋ねると、ふっと微笑む。＜じゃあ、何だろ…？歩数は数えたりするの？＞「…歩数は数えない」＜そうかー＞感覚の言語化は難しいとわかってはいたが、先天性全盲であるCIと、晴眼者であるThの感覚の“違い”こそが両者を繋ぐ手がかりだと思い、これを尋ねていくことで面接が進行していく。

期末テストの話題に（＃5）。＜数学が苦手って言ってたっけ？＞「はい」図形が難しいとのこと。＜そっかー。テストに出る…。図形…＞やっとThは図形は視覚情報であるということに気がつく。＜図形の勉強する時って…、例えば三角形だったら、はじめ勉強する時に三角形の形をしたものを手で触れてみるの？＞「はい」CIは触覚で図形を理解していることが分かる。しかし、CIがどうやってテストを受けているのかわからずに＜どうやってテストを受けているのかなあ…？＞と思わずつぶやくと、「書いて答える」と教えてくれる。＜じゃ、テスト受ける時は、その図形を頭の中に思い出して解いているの？＞「はい」＜難しそうやなあ…＞「そうでもない」全盲であるCIが『そうでもない』と答えるのは当然と言えば当然であり、この時『難しそう』と思ったのは晴眼者であるThの価値観である。この両者の世界の断絶を強く意識させられた。

再び歩行訓練の話（＃7）。＜歩行訓練って何を一番初めに習うの？＞しばらく考えた後、「白杖のつき方」と教えてくれる。＜白杖のつき方ってどういうものなんだろう？＞「・・・」＜A君はどんな風に教わった？＞「・・・」沈黙になるが、CIは何かを考え、それをThに伝えてくれようとしている気がした。ふと見ると、CIは左手に持っている白杖に右手を添え、杖の先を小さく右、左、右と動かしているようだった。＜いま杖を小さく左右に動かしてくれているよなあ＞と言うと、CIの杖を動かす手が止まる。＜口で説明するのは難しいんかな。今やっているように実際にやってくれるかな？＞と促すと、おそろおそろ、という感じで、白杖を右手に持ち替え、座ったまま白杖のつき方を実演してくれる。右、左、右と点で杖をつくのではなく、左右に杖を振りながら前方の地面をなぞるような感じ。初めて言語的なやりとりではなく、“動き”が取り入れられる。

学校でボーリング大会があることがわかり、それにまつわる話題が続く（＃8～＃10）。＜A君は今までにボーリングってやったことがあるの？＞「はい」投げる方向や、倒したピンについては周りの人に教えてもらっている。＜ボーリングをするとどんな感じがする？＞「…難し

い」＜どういうところが難しいのかな？＞「真っ直ぐ投げる…」＜じゃ、逆にボーリングの楽しいところはどんなところ？＞「・・・」長い沈黙となる。＜ゆっくり焦らんと考えてくれたらいいからな＞「・・・」やはり沈黙が続く。これ以上待ってみてもCIは答えられそうにないな、と感じたので、＜色々あって難しいかな？＞と訊くと、「難しい」と答えるCI。＜フォロースルーって知ってる？＞「いえ…」＜ボールを投げた後の手の動きなんだけど…＞CIが椅子に座ったまま右手で投げるような動きをする。＜そうそう、ボールを投げた後の手を真っ直ぐ上げると、回転がかかりにくいって聞いたことがあるなあ＞「・・・」CIは何度か投げる真似を繰り返している。

#4以降、CIは独力で盲学校から相談室まで来られるようになっていたが、相談室内の待合室から面接室まではThの補助で誘導していた。＜A君は学校からここまでひとりで歩いてくるよね？＞「はい」＜でも、待合室から面接室までは僕の補助で歩いてきている＞「はい」＜うん、それなあ、A君自身はどう思ってるのかなあって思って＞「・・・」＜誘導するのがいやとかじゃなくて、A君の意思を尊重したいなって思ってるの。もし、この面接室まで誘導なしで歩きたいのだったら、協力したいなって。僕は歩行訓練をやったことないから、うまく説明できるかどうか分からないんだけど＞「・・・」＜どう？この面接室まで自分で歩いてくるか、今まで僕がどおり誘導してくるか、A君はどっちがいいかなあ？＞「…自分で」CIと待合室から面接室まで歩く練習をするために廊下に出る。＜どうしよかな…。とりあえず初めは一緒に歩いてみようか？＞と言ってCIの少し斜め前（いつもCIに腕を掴んでもらい誘導している位置）に立ち、一緒にゆっくりと歩く。廊下の床には目印となるようなものが何もないので、壁側にある面接室のドアの位置を説明しながらCIと一緒に歩いていく。「・・・」上手く説明できた自信はなかったが、CIは戸惑うことなく歩いて行く。ドアの場所を白杖で探っている様子もあまり見受けられなかった（#11）。

## 第2期（#13～#20）：つながっていく世界

春休みを挟み、CIが盲学校高等部の2年生になった。進級してすぐ、予約が入っていなかった週にCIが来室する。何かと尋ねると「（面接がないことを）忘れた」とのこと（#13）。

＜今、A君が何か興味あることって何かある？＞と尋ねると「…野球」と答えてくる。盲学校の部活動で野球をやっている。質問に詰まりやすいCIが、どういう訳か野球についての話題には答えられる場面が多く、これ以降しばらくの間、野球の話題を中心に面接が進んでいく。体の線が細く、一見、運動があまり得意ではなさそうに見えるCIだが、高校生になってから出会った野球は大きな意味があるように思えた。

最近の部活動はどうかと尋ねると、週末に他校との練習試合があって、それに向けて新入生と練習中だという。CIのポジションはピッチャーかレフトで打順4番。思わず＜へえー！＞と驚くと、CIはわずかにはにかむような素振りを見せる（#14）。

練習試合の結果を聞く。CIはレフトの4番で出場。大勝した。打率は5打数4安打。エラーなし。＜4番の仕事してる、って感じやなあ＞CIは照れ臭そう。頭の中でCIのプレイする動きを想像していると、次々と疑問が浮かんでくる。＜ピッチャーはボールを転がして投げるって言ってたけど、球種っていうのかな、例えば、カーブとかスライダーとかってあるの？＞「ある」＜へえー。それってどういう風に投げてるの？＞「・・・」＜ストレートは真っ直ぐやからボーリングみたいに投げればよいのかな。でもカーブって…＞CIはまたおずおずと右手を椅子に座ったまま、動かし始める。＜ふんふん、今もちょっと手を動かしてるなあ。ひょっとしてA君も何か投げられるの？＞「はい」＜どんな種類のボール投げられるの？＞「ストレートとカーブ」相変わらずCIは手を動かしている。＜手を動かしてるってことは、ちょっとやってみてくれるのかな？＞と、誘うとCIは立ち上がる。ボーリングのようなフォームで、投げる瞬間に手首を捻るような感じ。いつもの自分のフォームとは感覚が違ったのか、首を捻りながら何度か投げる真似をしている。＜ほおー。リリースっていうのかな？ボールを放す瞬間に手首を返すっていうか、捻るっていうか、なんかそんな感じだね。ありがとう＞と言うとゆっくりと席に戻る（#15）。

＜ボールを打った瞬間に飛んでいく方向とか、距離とかは分かるの？＞「はい」＜へえー。打った瞬間はどんな感じ？＞「気持ちいい」これまでなかなか表出されなかったCIの気持ちが自然な感じで話される。＜バットで打ったらボールは宙に飛んでいくの？＞「…時々」＜へえー。バットをどういう風に振ってるのかな…＞「・・・」CIはおずおずと持っている白杖をわずかに動かし、腰を浮かし立とうとしているように見えた。それを見て＜実際にやった方が早いって言うのなら、ちょっと横の広いトコでやってみてくれる？＞と言うと、CIはゆっくりとソファから立ち上がり、横のスペースで実演してくれる。股を割って中腰で構え、バットに見立てた白杖の先を地面につけスイングする。ゴルフのスイングを中腰になってやる感じ。極端なアップスイングになるために、ボールは宙に跳びそうな感じ。＜なるほど。よく分かったわ。ありがとう＞CIは少し照れ臭そうに席に戻る。

＜守備してるときにボールが飛んできた感じってどうやって分かるの？＞「音で」＜へえ。どんな感じの音なんだろ？＞「鈴が…」＜なるほど。鈴が入ってるんか。どのくらいまで近くに來たらわかるんかな？＞「・・・」＜メートル…？んー、それじゃわからんか…＞なんとかCIの体験している世界に近づきたいと思うが、うまく言葉にできない（#17）。

大会があったというので、その結果を聞く。＜どうやった試合は？＞「・・・」＜ふん、なかなか答えにくそうやなあ。じゃあ、順番に聞いていこうかな＞午前中に行われていた初戦の結果を聞く。19対1で圧勝。5回コールドゲーム。CIは5打数5安打8打点。＜よい成績やね＞「嬉しい」＜満足？＞「満足している」守備についているときに、ボールが一度も飛んで来なくて「退屈だった」（#18）。

2回戦は11対5で勝利。CIは4打数4安打4打点。ホームランも打った。初日の試合はこの

2試合のみ。2日目。決勝戦。この試合に勝てば全国大会に出場できる。しかしCIのチームは9対10で惜敗してしまう。＜すごい接戦やし、残念やったなあ＞「はい」＜試合が終ってみてどんな感じがしてる？＞「悔しい」＜悔しいなあ＞「はい」＜どんなことが一番悔しかった？＞「・・・」沈黙になる。＜あのプレーがなかったらとか、あそこでもうちょっとがんばってたとか、どんなことでもいいんやけど、言葉にできる？単語でも、どんなことでもいいんやけど＞「・・・」やはり沈黙。CIの眉間に皺が寄ったような気がした。それでも待っていると、やや苦しそうに「難しい」と呟く。＜難しそうにしてたもんなあ＞視覚を使ってCIの様子を観察しながら発言していることに居心地が悪くなってくる。＜どういう所が難しい？＞「・・・」＜色々あると思うんやけど、何を喋って良いかわからないとか、考えがまとまらないとか、特に何も思いつかないとか…＞「考えがまとまらない」＜ああ、なるほど。考えをまとめて相手に伝えるって難しいもんなあ。どうしたらいいんだろ…？＞「・・・」沈黙が続く（#19）。

### 第3期（#20～#35）：深まる世界とクライアントの怒り

期末テストと夏休みを挟んで、約2ヶ月ぶりにCIと会う。＜夏休みは何してたの？＞しばらく考えている風のCI。「・・・」長い沈黙になる。CIの身体がゆらゆらと舟を漕ぎ始める。CIは閉眼して俯いている。こちらからは非常に眠たそうに見える。＜眠たい？＞と尋ねると、CIにしては珍しく「眠たくない」と即答するが、しばらくするとまた眠ったような状態になってしまう。CIの身体は左右にゆらゆら揺れている。左手に持っている白杖を座っているソファに立てかけようとしては失敗する、という動作を何回か繰り返している。その動作をしながら、何か考えているようにも、退屈しているようにも見える。顔は伏せがちだが時折、はっと上げ、何かを言いたそうにしてはまた、俯いている。その時、CIが手を滑らせて、持っている白杖を床に落としそうになる（#20）。

CIの眠ったような状態からの連想で夢の話に。＜夢の中にさ、他の人…、知ってる人が出てくることはある？＞「…ある」＜その人ってさ、どうやって“その人”だって判断してんの？やっぱり声でわかるの？それとも他に何かあるのかな？＞「声でわかる」晴眼者であるThにしてみれば、必ずと言ってよいほど視覚情報が伴っている“夢”が、全盲者であるCIにどう体験されているのか想像をすることが難しかった。＜ああ、声でわかるんだ。…誰かが夢に出てくるときって、声だけなの？それともその人として出てくるの？＞「・・・」＜…ちょっと解りにくい訊き方やったねえ。何て言ったらいいのかな？夢の中での他人は声だけの存在なの？それとも、人の形をしてるっていうか、“その人そのもの”が出てくるの？＞言い直してもやはり解りづらい言葉になってしまったが、CIは「人そのもの…」と答えてくれる。＜へえ、そうなんやー＞と言ってはみたものの、CIの言う“人そのもの”がどんな体験として夢に出てくるのか想像出来ない。しばらく考えてみたが、それをどのようにCIに尋ねたらよいかわからない。

そこでCIが“人”をどのように認識しているのかを尋ねてみることに。

＜例えば、A君が教室で、ひとりで座っているとします＞「はい」＜そこに誰か他の人が来たときに、A君はその人がどこまで近づいたら“その人だ”って判別できるの？＞「・・・」＜教室に入ってきたとき？それとも近づいてきたら？すぐ傍に来て声をかけてから？＞「近づいてきたら」＜それは何を…、どんなことを手がかりに判別してるの？＞「・・・」何かを考えているCI。＜んー、どんなことがあるんだろ。扉を開ける音？歩く音？雰囲気みたいなもの？匂いとか…？＞「歩く音」＜へえー！歩く音で誰かがわかるんだ＞「はい」CIは相手が走っていても、複数であっても、どんな靴を履いていても判別できるという（#21）。

面接開始時から沈黙が続く中、ふと、箱庭のアイテムがThの目に留まる。アイテムの中でも一番大きく（25cm程度）、形のはっきりとしている麒麟の人形を手にとる。＜A君、ちょっと手を出してくれる？＞人形をCIに手渡す。＜それ何かわかる？＞丹念に指先で形を確かめるCI。しばらく触っているが、分からない様子。＜難しいかな？＞「難しい」＜それ麒麟なんだけど＞各部位を説明する。＜麒麟は知ってる？＞「知ってる」＜学校で勉強する時って、今と同じように人形を使って習うの？＞「はい、そうです」＜そうなんや。動物園は行ったことある？＞「はい、あります」小学校の頃に動物園に行ったことがあるとのこと。＜その時は、周りの人に口で説明受けただけ？＞「そうです」高校まで普通学校に通っていたCIが、周りからどのように扱われていたのかなんとなく想像できてしまい、何ともいえない気持ちになる。＜…麒麟ってどれくらいの大きさか知ってる？＞「知らない」Thは『やっぱり』という思いがして落胆するが、同時にこの言葉によってCIの住む“視覚に頼らない世界”が象徴的に表されている気がした。

麒麟について説明する。＜麒麟って大人になると、頭のとっぺんまでだいたい5メートルくらいにもなるの…って、“5メートル”って分かり辛いかなあ。えーと…だいたい1階から2階のベランダより高いくらいになるのかな？＞うまく伝えられたか分からなかったが、CIを見してみると不思議そうな顔をしている。丹念に麒麟の人形を触り、その形を確かめているようだった。麒麟の説明を続ける。＜それで、麒麟は色が…、って、A君って“色”って分かるの？学校で習ったりした？＞よい機会だと思ったので、色の概念についてCIに訊いてみることにした。「はっきりしていればわかる」CIが例えほんのわずかでも視力に頼ることができることを初めて知ったので、驚く。＜A君が今日来ている服の色ってわかるの？＞CIは着ていたパーカーに目をかなり近づけ、顔を微妙に上下させている。色が網膜に映る場所を探しているように見えた。「…青」＜じゃ、今持ってる麒麟の色はわかる？＞CIは丹念に何度も麒麟に目を近づけて色を見ようとしている。麒麟は明度の低い中間色。CIは困ったような表情をしている。＜難しいかな？＞「ちょっと難しい」少し残念そうな様子。＜その麒麟は茶色…っぽい色してるのかな？本物はもうちょっとだけ黄色いはず＞再び麒麟に顔を近づけ、目に色



を映そうとしている。そして、また形を確かめるように丹念に人形に触っている（＃22）。

＜キリンもそうだけど、そのキリンみたいに学校とかで習って知識としては知ってるけど、実際にそれがどういうものか分からない、ってものは結構あるのかなあ？＞と尋ねたとき、「結構ある」と、これまでになく力強く即答した声には、これまで表現されることのなかったCIの“怒り”が含まれているように感じた（＃23）。

箱庭のアイテムであるキリンの人形に触れてもらったことをきっかけにCIを箱庭に誘ってみる。＜やってみる？＞と尋ねると、返事をする代わりにゆっくりとソファから立ち上がる。これまでThの提案した非言語的なやりとりをCIは固辞していたが、初めて応じてくれる。砂箱の大きさ、台の高さ、砂の種類を説明し、更にアイテムの一つ一つを手にとってもらいCIに説明する。CIは興味深そうに指でアイテムの形を丹念に確かめながら、Thの言葉を聞いている（＃24）。＜どうしようかな…。とりあえず、砂に触ってみる？＞と言うと、CIはおずおずと手を差し出し、箱庭の外淵に沿って、ぎこちなく手を動かし、箱庭の形を確かめる。＜そう。それくらいの大きさの浅い箱に砂が入ってるよ＞CIは更に慎重に指先だけで箱庭の砂に触れてみる。＜うん。それが砂。一面に入ってる＞今度はゆっくりと手のひら全体を砂に押し付ける。そのまま少し左右に動かしている。しばらくその様子を見てから、CIにじょうろを手渡し、砂を濡らして形を作ってもよいことを説明する。CIは数滴じょうろからぼたぼたと水を垂らし、それを指先で受け止める。砂に触れた指先を水で濯いでいるような感じ。指先から砂の上に水が垂れ、砂の質感が変わった部分にも触れる。他の部分との感触の違いを確かめている様子。しばらくその様子を見てから、＜砂で何か形を作ってみてもいいし、感触を楽しむだけでもいいし＞と促す。左手でぎこちなく砂の表面をなで、時折、砂にほんの少し指を埋めてみる。しばらくすると砂の感触に満足したのか、CIの動きが止まる。どうThに声をかけたらよいかわからないような感じで固まってしまったので、＜もう十分に触った？＞と尋ねてみる。「はい」＜砂を触ってみて、どんな感じがした？＞「・・・」＜どんな感じがかな…？気持ちよかった？それとも特に何も感じなかった？＞「気持ちよかった」（＃25）。

＜砂にちょっと触ってみる？＞と箱庭に誘うと、CIはゆっくりと立ち上がる。白い砂が入った砂箱と、黒っぽい砂が入った砂箱、ふたつ並べて置いてある砂箱のうち、CIは白い砂が入っている方に手を伸ばす。はじめはおずおずと、表面をなでるように。しばらく触った後に、隣の砂箱に手だけを伸ばし、黒っぽい砂を指先で感触を確かめるように触り始める。＜A君の好きなほうを触ってくれたらいいからな＞と声をかけると、黒い砂箱の前に体を移動させ、触り始める。初めは白い砂と同様に表面をなでるように触っていたが、次第に指先（第一関節くらいまで）を砂に埋め始める。今回は本当に表面をなでただけだったが、今回は指の跡が残るくらいの強さでなでていく。しばらくそのまま砂の感触を確かめるように触っていたが、次にCIは二つ並べて置いてある砂箱のちょうど真ん中に立ち、右手で黒い砂を、左手で白い砂を同時に触り始める。指先で砂を適当につまんでみて、その感触の違いを確かめているように見えた。

その後、もう一度白い砂に触りにいき、再び黒い砂へ戻ってきた時に「もういいです」とCIから声がかかる。

席に戻る。＜今日は砂に触れてみてどんな感じがした？＞「・・・」やはりCIは答えられない。＜うーん、“どんな感じ”っていうのは言葉にするのは難しいんだよね＞「難しい」＜じゃあさ、A君は左の箱（白）と右の箱（黒）の両方の砂に触っていたよね＞「はい」＜右と左では違いはあるの？＞「はい。あります」＜何が違うんだろ…＞「・・・」ふいにCIが眠り始める。今までにない深い眠り。Thも強烈な眠気に襲われる。不思議な感じがした。途中一度CIが目覚めたような素振りを見せた時に、＜A君は左の砂（白）と右の砂（黒）、どちらが触りやすい？＞と声をかける。「・・・」Thの声が届いていないかのように、CIは何も答えることなく、再び眠りに入ってしまったが、しばらくして眠ったような表情のまま顔をほんのわずかこちらに向け、ボソッと「…左」と答える。眠りの世界からなんとか抜け出してきて答えてくれたような感じがした。再びCIは深い眠りに落ちていく（#27）。

期末テストの話題から、美術の授業の話題へ。＜いま美術では何を作っているの？＞「・・・」しばらく待っているとCIは眠ってしまう。そのまま10分あまり経過する。CIは深い眠り。ThはCIが起きたら、この“眠たくなること”について訊いてみようかなと、ぼんやり考えていた。しばらくしてCIが目覚ます。するとCIはこちらを向いて、何か言いたそうに体をもぞもぞ動かしている。＜どうしたの？＞CIは口をばくばく動かしている。なにかぼそぼそつぶやいているように見えるが、声にはなっていない。しかしCIは何度もこちらに向いて何かを伝えようとしているように感じた。これまでのCIならここで固まってしまい、その様子を見かねたThが何かしらの介入を行うところなのだが、今日のCIはこれまでとは少し様子が違うように思った。CIの中で何かが高まっていくのを感じ、何度も『頑張れ』とか、『焦らんでもいいで』と声をかけたくなる衝動に駆られるが、ぐっと我慢する。CIは声をだそうと何度も何度も挑戦している。CIの中の高まりが最高潮に達したとき、CIからなんとか「ランプ」と聞き取れる声を発する。時間にして20分あまり経過していた。

眠る前にThが尋ねた質問に、ここまで一生懸命に答えてくれようとしていたことがわかり、感動する。＜ランプを作ってるんだねえ…＞しばらく何を喋ったらよいかわからない。CIも発言できた達成感に浸っているような感じ。＜…言えたなあ＞とThが声をかけると、CIは笑顔を見せる。嬉しそうな様子。＜ちょっと疲れた？＞「ちょっと疲れた…」笑顔を見せながら答える（#28）。

＜授業で作ったランプなんだけど、それはいくつかの課題の中から自分で選んで作ったの？それとも、先生が作れって言ったもの？＞「・・・」しばし沈黙。しかしCIは答えてくれそうな気がしたので、そのまま待ってみる。「じ、自分で選んだ」視覚の不自由なCIが自らの意思でランプを選んだということがわかり、CIにとってランプはとても重要な意味を持っているように感じた。＜なんでA君はランプにしたの？＞「・・・」これまでのCIならば答えるのが難し

い質問であったが、何か答えてくれそうな予感に、とりあえずThからは何も働きかけはせずに待ってみる。CIは何かを言おうとして失敗するという動作を繰り返している。途中何かを言いかけて「えっ…」と声が出るが、直後に咳き込み後が続かない。しかし、何回目かのチャレンジでついに喋ることができる。「難しいほうを…作ってみたかったから」太く、しっかりとした声。いつもの一単語のみをボソッと答えるようなイントネーションの声ではなかった。＜そうなんだ。ランプは難しかった？＞「難しかった」（#30）

この頃から、CIはこちらの問いかけに対し、何かを考えているような状態から、ずっと眠ったような状態になることが頻発する（#31～34）。これまでThの問いかけによって成り立っていた会話も少なくなり、沈黙している時間が増える。

＜学校での調子はどう？＞「・・・」長い沈黙になる。初めは何かを考えているように見えたが、次第に眠りに入る。そのまま10分程度時間が流れる。普段ならこのあたりで声をかけたりするのだが、なぜか今日はこのままでもいいような気がしてきて、そのまま何もしないようにした。CIはうつらうつらとしている。しばらくすると突然、CIが目を開き、上体を起こす。そして、これまで箱庭の砂に触るとき以外は決して離そうとしなかった白杖をゆっくりを床に置く。何事かと思って見ていると、CIは上体を起こし、白杖を握っていた手でソファの肘掛を握り、立ち上がろうとして全身に力を入れているように見えた。まるで箱庭の砂に触るときに白杖を置いて立ち上がるのと同じような姿勢に見えた。＜どうしたの？＞声を掛けるが、CIからの返事はない。もっと声を掛けたくなる衝動に駆られるが我慢する。CIは何度か姿勢を変えながらもぞもぞとしている。更にそのまま様子を見ていると、CIはまた眠り始めてしまう。そしてゆったりとした周期で眠りと覚醒を繰り返している。CIの取ろうとした行動は何であったか分からずじまいのまま面接終了時刻となる。面接終了までCIが一言も発することはなかった（#35）。

#### 第4期（#36～54）：社会へ

春休みを経て、CIは三年生に。Thが＜久しぶりだね＞と声をかけると笑顔を見せる（#36）。＜A君、進路って何か考えてるの？＞「…し、進学したい」＜なるほど。大学ではどんなことをしたいの？＞「情報処理」＜情報処理っていうと…パソコンなのかな？＞「はい、そうです」盲学校ではパソコンの授業があり、触れる機会は多いとのこと。音声読み上げソフトを用い、インターネットを閲覧している。＜具体的な大学って決まっているの？＞「はい」＜へえ。どこの大学？＞「・・・」CIは答えることができない（#37）。

CIが高校生になって打ち込んできた野球も引退の日が近づいてきている。引退前に最後の大会があり、地区大会で優勝すれば全国への道が開ける（#38）。＜野球の試合はどうだった？＞試合の結果を尋ねる。「優勝した」＜おお！おめでとう＞これにより夏休みに開催される全国大会に出場できることに。＜この前の大会で負けたチームに雪辱を果たせたんだ？＞「はい」CI

は誇らしげに答える。＜じゃあ、今は全国大会に向けて練習中なのかな？＞「はい」（#39）＜ポジションは相変わらずレフトが中心？＞「いや、ピッチャーも…」＜ピッチャーもか。先発投手なの？＞「いや、最後だけ…」＜ストッパーってやつなのかな？＞「はい」＜変化球は上手に投げられるようになった？＞「・・・」しばらく待ってみると、CIは座ったままゆっくりと投げる動作をしている。促すと実演してくれることに。これまで何度か動きを表現してもらったが、その中でも一番スムーズで力強かった（#41）。期末テスト一週間前。「ホントは部活したい」テストはそこそこできそう（#43）。眠ったような状態になるも、目を覚まし、持っていた白杖の継ぎ目を触り、継ぎ目を回しねじ込むような動作。それについて何とか説明してくれようとするが言葉にならず。説明が長くなるから喋れなくなっている訳ではない。「少し身体が疲れている」（#44）。

夏休みを挟んでの面接（#45）。さっそく野球の全国大会について尋ねてみる。＜どうだった？＞「・・・」何か言いたそうにした後、俯いてしまう。＜どうしたの？＞「…行けなかった」＜え？＞「・・・」＜何かあったの？＞「…盲腸になった」試合直前に盲腸となり、10日間入院した。盲腸は破裂寸前で開腹手術をせねばならなかった。＜そうなんや…＞言葉にならない。＜残念やったね＞「…はい」＜他に思うことはある？＞「悔しい」＜そうだよな…＞チームは全国4位の成績だった。手術は、部分麻酔で1時間半くらいかかった。術後、麻酔が切れると痛かった。入院中も痛みのためにほとんど動けず暇だったので、ラジオを聴いていた（#46）。

結局最後の試合には出ることが出来ずに引退となってしまったCIに＜じゃあ、あとは受験勉強に専念するだけかな？＞と尋ねると、まだ文化祭があるとのこと（#47）。文化祭では『夕鶴』の劇をやった。Thはその劇がどういうストーリーか知らなかったの、＜どんな内容の劇？＞と尋ねると、CIは眠ったような状態に。途中、目を覚ましたCIに＜眠たかった？＞と聞くと「眠たくなった」と答える。こういう状態になった時、これまではずっと眠たくはないとCIは言っていたのだが、ここにきて初めて「眠たい」と表現できるようになった。Th以外の人（例えば家族や友人、友達など）と話している時に眠たくなることはない。ここでカウンセリングを受けている時だけ、ふいに眠たくなることがある。他ではない。よくわからない。＜不思議やなあ＞「はい」カウンセリングと違い、劇の台詞のような予め言うことが決まっている言葉は苦労なく話すことが出来る（#48）。

もうすぐ志望校の入試がある。大学名、学部については「あんまり言いたくない」。学校で面接対策をしている。「まあ、大丈夫だと思う」。「今日は眠たくない」（#49）。

受験校は遠方なので、新幹線で移動する。＜新幹線って乗ったことある？＞「ない」＜どういう乗り物かっていうのは知ってる？＞「はい」＜速さって…何て言ってよいのかわからないんだけど…、A君はわかるの？＞「はい」＜へえ。どうやって感じてるんだろ＞「目に映る」形までは判らないが、動くものは把握できる（#50）。

受験の結果を聞く (#51)。「自分ではできたと思う」。面接は緊張しなかったが、控え室で順番を待っていた時には緊張した。面接は約40分程度あったが「あっという間」だった。質問にはスムーズに答えることができた。＜よく言葉の詰まるカウンセリングとはえらい違いやね＞と笑いながら言うと、「はい」とCIも苦笑している。＜何が違うのかなあ＞「・・・」＜言葉にできることある？＞「…わからない」。Thの質問に答えようとして言いそびれることがある。ほかの場面ではあまりない。なぜ言いそびれるのかはわからない。

CIにとって高校生活最後の冬休みが終わり、CIは第一志望の大学に合格した。4月からまた寮生活をしながらコンピュータプログラムについて学んでいくという。そんな折、CIからTh宛に電話がある。ひとつ言葉を発するのにもすごく時間がかかるCIが、自ら電話をかけてきたこと自体が驚きなのだが、そんなThの思いとは裏腹に、CIは電話口で「風邪を引いたので今日の面接は休ませて欲しい」と、声も明瞭に話す。面接室とのギャップに驚く。

翌週、風邪は治り、CIが面接にやってくる。CIの高校卒業に伴い、カウンセリングも終結に向かっていた。＜A君が一年生の頃からだから、約2年半くらいカウンセリングを続けてきたんだけど、A君にとってこのカウンセリングってどんな体験だったのかな？＞「・・・」長い沈黙。＜こういうことって言葉にするのは難しいと思うけど＞「難しい」＜面接も次回で終わりだし、なんとか答えて欲しいなあ…＞次回までに考えてきてもらうことに。＜カウンセリングで一番印象に残っていることってある＞「・・・」Thがこれまでを振り返り、色々と例を挙げる。「・・・」＜何か別のこと？＞「いや、ある」＜言える？＞「はい」＜何だろ？＞「クラブの話」＜へえ。クラブの話なんだね＞「好きなことだから」。大学に進学しても「野球は続けたい」。( #53)。

終結面接。尋ねられたことについて「考えてきた」が、この場で言うのは「難しい」。＜単語でも？＞「はい」＜緊張する？＞「はい」＜そうだよね＞怖さではない。喋れないのは「この場だけ」。＜そもそも人前で話すことができない、ってことでカウンセリングを始めたんだよね。どう？喋れるようになった？＞「はい。だいたい喋れるように…」学校でもだいたい話せるようになった。＜ここでも比較的話しやすいことと、そうでないことがあったね＞「はい」客観的事実は喋れる。難しいのは自分の思いや感情を「説明すること」。

＜いよいよ卒業だね＞「はい」CIは前を向き、力強く話す。＜不安なことはない？＞「いえ、ある」＜なんだろ？＞「遠い…」＜そうだね。これまでと違って、週末ごとに実家に帰るってことはできないかもね＞「はい」＜なんとかやっていけそう？＞「はい。大丈夫です」面接が終わり、廊下で見送るThに「ありがとうございました」と小さいがはっきりとした声で頭を下げて、全盲のCIにとっては、おそらく何の手がかりもないに等しい相談室の廊下をいつもと変わらぬしっかりとした足取りで帰っていった (#54)。

#### Ⅳ．考察

クライアントは先天性全盲というハンディキャップを抱えている。セラピストはこれまで視覚障害の人と接した経験を持っていなかった。「話をする事ができない」という主訴を持つ全盲のクライアントにどう接すればよいかわからずに狼狽するばかりであった。

生まれつき視覚という感覚を使って外界とのやりとりが難しいクライアントにとって、「話をする」という主体的な行為は、「聴く」、「触れる」といった外界とつながるための重要な手段に並ぶものであろう。クライアントはそれができないという状態なのである。外界からの情報はクライアントにもたらされるが、クライアントの方からは発することができないのである。本来、双方向に開かれているべきコミュニケーションがひどく一方的なものになってしまっている。「沈黙」という方法によって外界に主体的に意思表示をしているとも捉えることはできるが、誰しもが沈黙に至るクライアントの心情を忖度してくれるとは考えにくく、日常生活において「沈黙」というコミュニケーション手段は甚だ不都合である。そもそも相手の心情を忖度するためには、身振り・態度といった視覚的な情報が不可欠であるので、現在クライアントが生活を送る盲学校においては、「沈黙」というコミュニケーション手段はほぼ成立しえない。一方的に入ってくる外界からの刺激に対し、沈黙という同じく一方的な手段によって応えることによって、どうにかクライアントは身を守ろうとしていたのだと考えられる。

ここでセラピストにとって重要な観点であるのが、クライアントは話を「しない」というのではなく、話が「できない」と訴えていることである。この「できない」という感覚こそ、クライアントが晴眼者のなかで生活を送ってきた中でとり着いたひとつの答えではないだろうか。盲学校に入学するまで、つまり中学校を卒業するまでクライアントはずっと普通学校へ通っていた。#23でキリンの人形に触れた際に、知識としては知っていても実際にはわからないことが「けっこうある」と怒りを含んだ声で答えたことから、クライアントが晴眼者に混じって生活をしてきた中で、自らの障害に基づく不快な経験も数多くしてきたことは想像に難くない。学校というものはその性質上、どうしても他者との差異性が浮き彫りになる。平たく言えば能力を比べられるのである。学業で、運動能力で、コミュニケーションで、他者と比べられ続け、その結果「できない」という思いを重ねてきたクライアントが、己の無力さを痛感し「話をする事ができない」という症状に帰結したのは十分に理解できる話である。「話ができない」というのは「話がしたい」という想いの裏返しでもある。クライアントの抱える「できない」という想いに十分に注意を払いながら面接を行い、その背後にあるクライアントの「したい」という想い、さらには「できるんだ」という想いまでクライアントが到達できればと考えていたが、いかんせんイニシャルケースである。その前途は困難を極めた。

インタビューを行うにあたり、セラピストは事前に視覚障害とそれにまつわる心理について書かれた本を読んでおこうと、図書館へ行って数冊借りてきていた。しかし、“視覚障害者に対す

る安全面での配慮”という項目だけを読むと、後は投げってしまった。絶対的な感覚の違いを、文字で知識として仕入れ、なんだか解ったような気になってしまうのを恐れたのである。どれだけ思いを巡らせてみても、生まれながらに視覚という感覚に頼らずに生きてきたクライアントの世界を想像するのには限界があった。しかしながら、晴眼者の中で苦労を重ねたであろうクライアントにとって、晴眼者が抱くクライアントに対するわからなさ、クライアントが晴眼者に抱くわからなさこそが、面接を進める上での重要な鍵になるような気がして、この『絶対的にわからない』という感覚を軸に面接を始めようと考えていた。

しかし、この『絶対的にわからない』という感覚を突き詰めていくと、クライアントにたいする共感の乏しさへ到達する。成田（2003）によると、共感とはセラピストの「あーそうだったのか」という発見、つまり、患者の経験と同型の（isomorphic）経験を自分の中に見出したときに、初めて患者の気持ちがわかったと感じられることである、と述べている。筆者も感覚的にこの意見に異論はない。つまり、ここで問題となるのは共感することがほとんど期待できないクライアントへのアプローチの方法である。この『絶対的にわからない』という言葉、もう少し我々が慣れ親しんでいる言葉に当てはめようすると“了解不能”という言葉が最も意味が近いのだが、この両者には微妙なニュアンスの違いがあるように考えられるので、本稿では用いないことにする。

セラピストは、この『絶対的にわからない』という感覚をオープンにし、＜A君がどんな風に感じてるか全然わからないから、いろいろ教えてもらいたいなって思ってるんやけど…＞と、クライアントに語りかけている（＃4）。『絶対的にわからない』という感覚がある、ということとを前提に、クライアントを『わかりたい』と働きかけたのである。共感にたどり着くような同型の経験は見出せなくとも、語られるクライアントの言葉を基に連想を拡げ、クライアントにとっての圧倒的多数を占める他者、つまり晴眼者がどのような観点からクライアントを捉えようとしているのか感じてもらうことはできると考えたのである。

セラピストの抱いた『絶対的にわからない』という感覚と『わかりたい』と働きかけた姿勢、この両者の間に横たわる断絶の深淵にクライアントは居たのである。クライアントが全盲であるということは、セラピストが視覚的な手段を用いてクライアントと意思の疎通を図ることができないということである。そういう意味においてはセラピストも同じく全盲であった。いみじくも＃1で、セラピストが“暗闇に放り出されたかのような気持ち”になったのはこれを象徴していると言えよう。そして、セラピストがクライアントの世界について『絶対的にわからない』のと同様に、クライアントもセラピストの世界、つまり晴眼者の世界は絶対的にわからないのである。セラピストは問いかけという行為によって、クライアントは沈黙という行為によって、『絶対的にわからない』という感覚をオープンにすることによって面接は進展していった。逆説的だが、お互いが絶対的にわかり合えないからこそ、関係をつなぐことができたのである。

本稿では、たまたまクライアントが先天性全盲という障害を持っていたので、この『絶対にわからない』という感覚に焦点が合いやすかったのだが、この感覚は他のケースにとっても極めて重要であるといえる。簡単にクライアントのことがわかってはいけないのである。土居(1992)の言葉を借りるのなら、“面接は「わかる」と「わからない」をめぐって緊張を孕みながら進行する”もののなのである。「共感」という言葉がもてはやされ、安易に用いられ過ぎて、あたかも共感が面接における第一目的のように語られることが多いが、我々が面接に臨む際には今一度、共感の前に横たわるこの『絶対にわからない』という感覚を思い起こしてみる必要があるのではないだろうか。

#### 〔参考文献〕

- PRIMARY LOVE AND PSYCHO-ANALYTIC TECHNIQUE (1956) : Balint, M. ; 一時愛と精神分析技法  
(1999) : 森茂起、柗矢和子、中井久夫共訳 みすず書房  
新訂 方法としての面接－臨床家のために－ (1992) : 土居健郎 医学書院  
精神療法面接のコツ (1990) : 神田橋條治 岩崎学術出版社  
治療のこころ (1995) : 神田橋條治 花クリニック神田橋研究会  
追補 精神化診断面接のコツ (1994) : 神田橋條治 岩崎学術出版社  
あいだ (1988) : 木村敏 弘文堂思想選書  
精神分析理論と臨床 (2001) : 北山修 誠信書房  
精神療法家の仕事－面接と面接者－ (2003) : 成田善弘 金剛出版

(まつざき りょうすけ 教育学研究科臨床心理学専攻博士後期課程)

(指導：東山 弘子 教授)

2007年10月11日受理